

平成16年度

第36回 越谷市民文化祭

平成16年11月18日(木)～21日(日)

10:00～19:00(最終日は18:00)

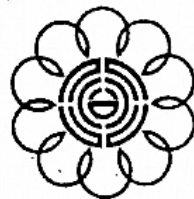
越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ

日本一の力持ち

三ノ宮卯之助

没後150年記念



- ◇周りの10個の輪は、昭和29年11月3日に合併した十町村である二町八ヶ村(「越谷町」の誕生)をあらわす。
十町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・菰島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。
- ◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を4個集めたもの。つまり、越谷の『越』(「コ4」)を意味する。
- ◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。
- ◇昭和30年11月3日には、草加町に合併していた川柳村のうち、伊原、菱塚、上谷が越谷町に入る。
- ◇越谷町は、昭和33年11月3日に市に昇格し、越谷市となる。

第36回 市民文化祭

郷土研究の部・展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
8	川崎の卯之助力石	17	古澤 孝	宮本町二丁目
7	綱島の卯之助力石	16	林 和江	春日部市大枝
6	木更津の卯之助力石	15	西村 功	下間久里
5	桶川の卯之助力石	14	須賀 弘 小泉平八郎	北越谷二丁目 南町三丁目
4	関東大震災と越谷	13	原田 民自	弥十郎
3	蒲生の忠魂碑	12	菅波 昌夫	南越谷二丁目
2	林泉寺の開創当初のご本尊	11	木村 恵俊	増林
1	旧西方・東方・見田方村の石仏	10	加藤 幸一	春日部市大枝

※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、

P K O 法人・越谷市郷土研究会の谷岡隆夫(当会会長・☎96217527)までお願いします。

◆三ノ宮卯之助

三ノ宮卯之助(文化四年、嘉永七年、一八〇七、一八五四)は、武州岩槻領三野宮(現・越谷市三野宮)出身の「力持ち」である。

江戸の中期ごろから若者たちの間で行われた力競べでは、卯之助はいつも最下位で「力なし」とからかわれていた。猛訓練を重ねて力をつけ、やがて江戸を代表するまでの「力持ち」となった。

一座を結成し、江戸の見世物興行で名声を博した卯之助は、さらに興行の旅めぐりに出る。足取りは関東周辺から兵庫奥姫路にまで及び、先々の神社には卯之助の名を刻んだ「力石」が奉納されている。現在、二十六カ所、三十七個が確認されている。卯之助の興行ピラや「力持ち」番付表なども現存している。

上方と江戸方の「力持ち」が日本一の座をかけて勝負した際、卯之助は江戸方の代表として出場し、みごと日本一の座を勝ち取った。しかし、その夜かれは急死する。毒殺されたともいわれている。享年四十八歳。

1. 旧西方・東方・見田方村の石仏

加藤幸一

旧西方・東方・見田方の三地区は、中世は武蔵國國郡大相模郡とよばれる地域であった。これら三郡の石仏に関する詳細な資料は、西方の大聖寺(大相模の不動尊)、東方の観音寺、見田方の淨音寺に置かれていた(以下、無料)願いたい。

旧西方、力持村

(1) 聖用水取水口そば傍

図1は、道しるべが刻まれた庚申塔である。元荒川上の段原寺や下流の吉川、近くの大相模の不動尊、遠くは下総国(千葉県)の市川への道しるべでもある。この聖用水に沿って南下すれば、市川方面に行けるのである。当時その水貴重な石仏である。

(2) 相模原

図2も道しるべを兼ねた庚申塔である。側面には、森屋寺、野原、越久谷、不動尊、草加、江戸の地名が刻まれている。

(3) 山野の閑寂堂

碑が六本もある四面金剛と呼ばれる仏像が刻まれた庚申塔(図3、5)が見られる。

(4) 大徳寺墓地

図4、10、同じく図像の庚申塔である。

(5) 黒須橋

図14は、上の石仏が炎に包まれた不動明王で、下が馬上に馬の頭を載せ、頭が三つで鏡が六本ある菩薩観音である。大相模の不動尊に参詣に行くための道しるべを兼ねていた。

(6) 石塚家(相模町二一五三一一)邸内

図15は、出羽三山の参詣記念の石塔である。

(7) 福寿寺墓地

図16は法華経を六十六箇國すべてに納めて回り終えた記念に建てた六十六部廻國塔である。

(8) 十一面観音堂

図23は、女性達が十九夜の月の出を待ちながら念仏を唱える行事を再現した記念に建立した石仏で、描かれた本尊は如意輪観音である。

(9) 大駒守の墓地

図22は、図16と同じ六十六部廻國塔である。

(10) 大聖寺

大聖寺は、大相模の不動尊とも呼ばれ、昔から不動信仰が盛んな寺である。



現在の鎌倉の地に江戸時代は聖若山と呼ばれたもう一つ高い小山があり、その小山の北麓斜面に図33の「北向き不動」が二重土俵で祀られていた。参詣人は、まず本堂を参り、それから後ろを向いて北向き不動を参った。江戸時代は、「合開井」と呼ばれる湧き出る井戸があり、ここで水垢離をしたのである。

「庚申」と刻まれた図38は、百鬼夜行の百鬼ある内の一つである。

図39は、手の込んだ庚申塔である。上部には瑞雲に横たった太陽と月がある。中央の六本の旗を持つ青面金剛は、炎のように逆立つ頭髪の中に、とくろを巻き鎌首をもたげた姿が見られる。顔付きは、袋笠の形相で三目となっており、相とは禪師の理境(百勝)をつけている。各手に、弓、矢、輪王、矛や剣を持ち、左手で女人の髪の手をつかまえて下下している。足下には、指が三本の鬼が踏み潰されている。その下には三狼がある。山王権現の使いの狼が、庚申の「申」と結び付き、且つ庚申の「三目」を顔になんて三狼となつたようだ。向かって右端は、神社の御幣を持つ見守る。御幣は神の依代である。中央の首は、頭が見られ、その下の陰部も表されていて雄液とわかる。当時は陰部に朱を塗って下の羽を治そうとする医長屋郎が見られた。左端は、誰が女性の醫師を陰部を連想させる桃を持つ。誰は性根の強い動物とされ、持ちも狼は庶民の苦で、手授け、安座、下の所の折腰の対象となつた。西方村の鎮守、山王三枝神社から強く影響を受けたのであろう。申の次は酉、夜明けの鶏鳴を聞いて庚申講を解散する。それと縁が刻まれている。

(11) 林塚(相模町三二五二一一)邸内

図48は、大聖寺境内にある「北向き不動」と同形式である。

(12) 聖徳の観音堂墓地

図50の普門品とは、法華経の観世音菩薩普門品のこと。常に「観音経」と呼んでいる。八万四千巻分の観音経を一人の女性(法名が妙善)が読了した記念に建てた石塔である。

(13) 金剛寺跡の地蔵堂

このお宝には、「開井」と刻まれていた地蔵尊の石仏があるが、ここが金剛寺跡とわかる。

(14) 田向墓地

入口の間に、図55と図56の庚申塔がある。

旧東方、力持村

(1) 久伊豆神社

東方村の鎮守の久伊豆神社には、「開井神社」文字塔がある。もとは、観音寺北東の十手道の北側にある法開神社跡地の小山にあった。

(2) 南郷(口治会館(兼地蔵堂))
この塔を本尊とする護国神社地蔵堂である。塔の石仏は、一石に六地蔵が描かれている。

(3) 坂根地蔵堂
ここには「西の中村家」の墓所がある。その中に文化財に指定された「六字名号塔」があり、中村家に代々伝わりつづけたもの。塔6は板敷を施した江戸初期の庚申塔である。

(4) 中村家(大坂町二二三一一) 跡塔
山村家の西隣地に、領地の境界を示すために立てられた塔の遺構がある。「最よみ米、忍痛」と述べ、この石から派生、忍痛(現在の行田市)の縁起地であるとしてを意味し、草加市の榊ノ木村で造られた。

(5) 中村家(大坂町二二三一一) 跡塔
即内には、市の天然記念物に指定されたクスノキがあり、その根元に塔の遺構が安置されている。遺構に石仏が埋め込まれ、地蔵(天然面)にかけられている。

(6) 地蔵堂遺構
大相模小学校のすぐそばにある。この墓地には「西の中村家」(大坂町二二三一一)の墓所があり、そこに「坂根地蔵堂」の記念塔がある。中村家の名主を勤めながら寺子屋を開いていたが、明治五年(一八七二)に親善寺に地蔵堂を設立した。後の大相模小学校につながるのである。

(7) 玉塚院遺地
西方の隅切、塔3と同じ四角四柱塔である。

(8) 大相模公民館跡
塔12は、永徳(年一六五三)、市内で最古の庚申塔といわれ、文化財に指定されている。

(9) 寺子屋跡
この寺子屋は、武蔵国三十三箇所所傳の遺構の一つである。塔13は、百のお堂を尊称する百重塔の石塔である。江戸初期に埼玉藩南部から蒞臨、茨城県にかけられて見られた。表題には「大相模村」の文字が見られる。この石塔ができた明暦年間には、大相模村は、西又、東方、見田方に分かれていたと思われるが、以前の言い回しで済んだのである。

田沼田方村
(一) 八坂神社

この八坂神社は、見田方村の鎮守である。塔3は、神道系の庚申塔である。仏教系は青面金剛であるが、神道系は猿田彦となる。塔4は、庚申塔を改刻した遺構塔である。遺構と

は、既述(伝説)や懸崖(たたりをする死者)が侵入してくるのを恐ろしくする神である。明治新政府による神仏分離の政策時に、忍痛(茨、行田市)では、藩内(即ち塔)に対しては表面を削るなどして「神神」と改刻する政策を講じた。ただし、後田彦の神道系庚申塔はその対象からは外された。忍痛の飛び地である見田方も例外ではなかった。

(2) 坂根地蔵堂
塔3は、江戸初期に全願の女性を十四人によって建てられた念仏供養塔である。

(3) 外池跡地(幸手道の河川側)
外池跡地の西端(大坂町一七七一)の土蔵の買割に、人柱に殺された跡がある。天明六年(一七八七)のこと、關東大火によって土手の堤防が決壊して大被害こうむった。その堤防の修復がなかなかにできない。そこに二人の遊礼僧をつれた者が通りかき、関くと二人を助ければ流入が止まると言われ、村人の相談の上、その二人の生涯を承諾なしに人柱にし、潮人を止め、その遺礼僧を供養するために石塔を立てたという。

(4) 後方自治会館東方の跡塔
塔7は、見田方の地にある改刻遺構塔である。

(5) 見田方の積善堂
塔8は西方の塔3と同じ一九夜念公塔である。

(6) 淨善寺
淨善寺の跡地は、現在の大相模小学校の北東第一帯にあつた字田家である。江戸時代には別荘の飛び地、榊ノ木相八田村の村々の名主を束ねる惣領家主を務めた家柄であった。塔は江戸初期に建立された石仏で、六字名号の四脚阿彌陀仏と阿彌陀像が見られる。

(7) 宇田家(大坂町六三三一一) 跡塔
塔12は、塔4と同じ改刻遺構塔である。

(8) 飯沼の東照寺跡地
塔3の庚申塔の基壇に「飯沼村」と刻まれているのがわかる。飯沼地区は、もともと見田方村とは別で、里社の小さな村であった。

(9) 大穴天竺(てんどうじ)
遺構の大穴にある第六天(六六六)神社の影響で建てられたもの。このお堂には言い伝えがある。もとは土手道に面した民家のある所にあり、お籠り時の神などとも縁がしかった。ある日のこと、突然大風が吹き、現在地まで吹き飛ばされたのだという。塔17の石塔には、「日得」の文字が見られる。今でもお籠り時の集まりが十月十五日にある。



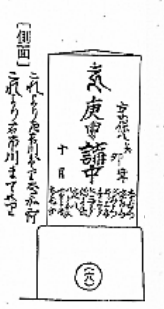
4号 青面金剛像庚申塔



3号 青面金剛像庚申塔



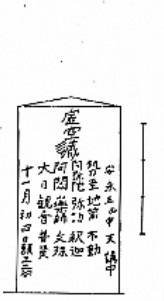
2号 道標行き文字庚申塔



1号 庚申塔



8号 不動明王像



7号 十三仏供養塔



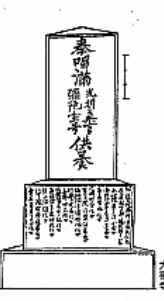
6号 地藏像付き念仏供養塔



5号 庚申塔



12号 石橋・敷石供養塔



11号 光明真言・名号供養塔



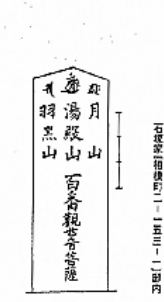
10号 青面金剛像庚申塔



9号 庚申塔



16号 六十六部廻國塔



15号 出羽三山・百箇所巡礼塔

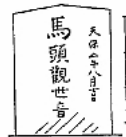


14号 道標行き不動明王及び馬頭観音像

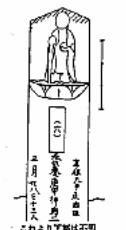


13号 庚申塔

17号 「馬頭観音」文字塔



21号 輪廻車付き文字庚申塔



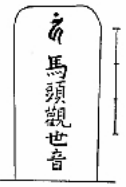
25号 青面金剛像庚申塔



29号 地藏菩薩像



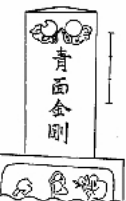
18号 「馬頭観音」文字塔



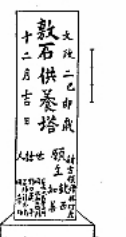
22号 文字庚申塔



26号 文字庚申塔



30号 敷石供養塔



19号 青面金剛像庚申塔



23号 十九夜念仏塔



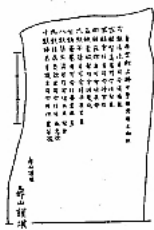
27号 文字庚申塔



31号 板碑型一石六地藏菩薩像



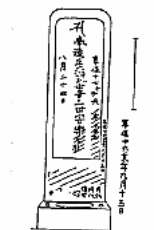
20号 青面金剛の御利益塔



24号 文字庚申塔



28号 六観音供養塔



32号 六十六部廻国塔



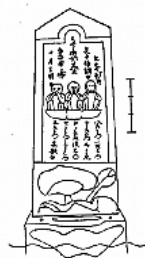
33号 「北向不動尊」石仏及び二童子像



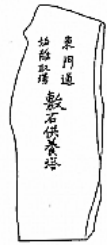
37号 青面金剛像庚申塔及び二猿像



40号 板碑型三猿庚申塔



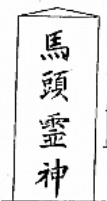
34号 敷石供養塔



41号 普門品供養塔



45号 「馬頭霊神」文字塔



35号 大聖寺止亀碑



39号 青面金剛像庚申塔



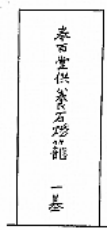
42号 文字庚申塔



46号 「馬頭観音」文字塔



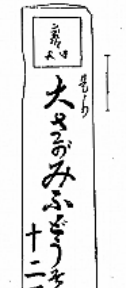
36号 巨豆巡礼及び石燈籠供養塔



43号 青面金剛像庚申塔



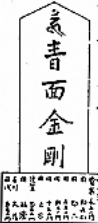
47号 「不動尊」道標石塔



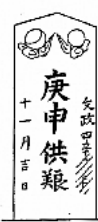
48号 不動明王三尊像
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



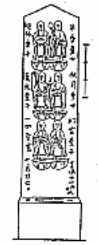
52号 文字庚申塔
本願寺



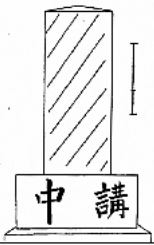
55号 文字庚申塔
日蓮宗



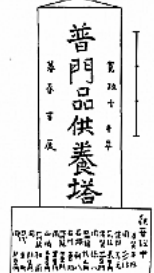
2号 一石六地藏菩薩像
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



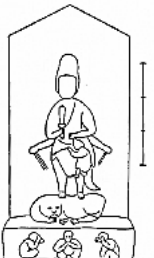
49号 「馬頭観音」文字塔
本願寺



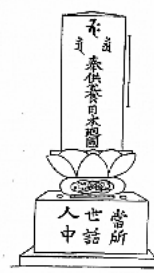
53号 普門品供養塔
本願寺



56号 青面金剛像庚申塔
日蓮宗



3号 六十六部廻国塔
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



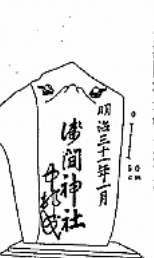
50号 普門品供養塔
本願寺



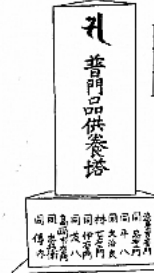
54号 斎藤家墓塔
本願寺



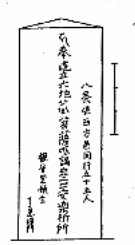
1号 「浅間神社」文字塔
本願寺



4号 普門品供養塔
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



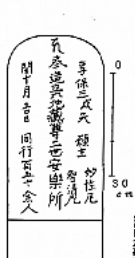
51号 六地藏供養塔
本願寺



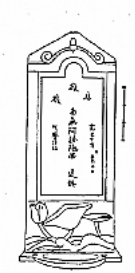
54号 地藏菩薩像
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



1号 六地藏文字供養塔
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



5号 板碑型文字塔
本願寺



6号 板碑型文字庚申塔
本願寺



9号 「伊奈利大神」文字塔
本願寺



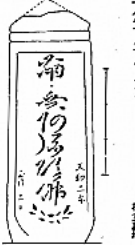
13号 板碑型百堂巡礼塔
本願寺



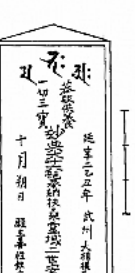
3号 猿田彦文字庚申塔
本願寺



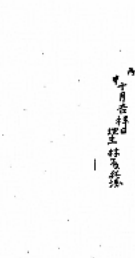
6号 六字名号板碑
本願寺



10号 六十六部廻国塔
本願寺



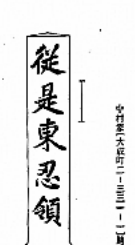
13号 板碑型百堂巡礼塔
本願寺



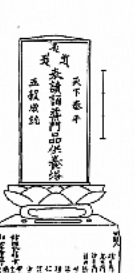
4号 改刻塞神塔
本願寺



7号 石鐘形示石
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



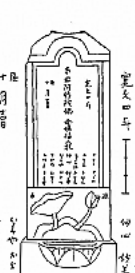
11号 普門品供養塔
本願寺



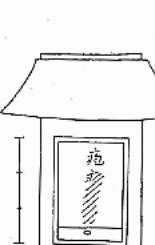
1号 観音菩薩像
本願寺



5号 板碑型念仏供養塔
本願寺



8号 泡盛神供養塔
本願寺(長崎県)一三三(一)四三



12号 承応二年の板碑型庚申塔
本願寺



2号 地藏像付き文字庚申塔
本願寺



6号 「水龍大権現」文字塔
本願寺



西方・東方・見田方の石仏所在地名

西方村

- (1)葛西用水取水口そば路傍 No. 1
- (2)閻魔堂橋 No. 2
- (3)山野の閻魔堂 No. 3~5
- (4)大徳寺墓地 No. 6~13
- (5)馬頭橋 No. 14
- (6)石塚家[観2-153-1]邸内 No. 15
- (7)福寿院墓地 No. 16~20
- (8)十一面観音堂 No. 21~31
- (9)大聖寺の墓地 No. 32
- (10)大聖寺(大相模不動) No. 33~47
- (11)林家[観3-251-1]邸内 No. 48
- (12)番場の観音堂墓地 No. 49~53
- (13)金剛寺跡の地蔵堂 No. 54
- (14)田向墓地 No. 55・56

東方村

- ①久伊豆神社 No. 1~4
- ②南馬場自治会館(新院跡) No. 5~6
- ③桜堂墓地 No. 7
- ④中村家[大観2-331-1]路傍 No. 8・9
- ⑤中村家[大観2-331-1]邸内 No. 10
- ⑥地藏堂墓地 No. 11
- ⑦玉蔵院墓地 No. 12
- ⑧大相模公民館そば No. 13
- ⑨観音寺

見田方村

- (1)八坂神社 No. 1~4
- (2)来福寺墓地 No. 5
- (3)外池跡地 No. 6
- (4)後方自治会館南方の路傍 No. 7
- (5)見田方の観音堂 No. 8
- (6)浄音寺 No. 9~11
- (7)宇田家[大観6-382-1]路傍 No. 12
- (8)飯島の東福寺墓地 No. 13~16
- (9)大六天堂 No. 17・18

今までの越谷市内の石仏調査資料

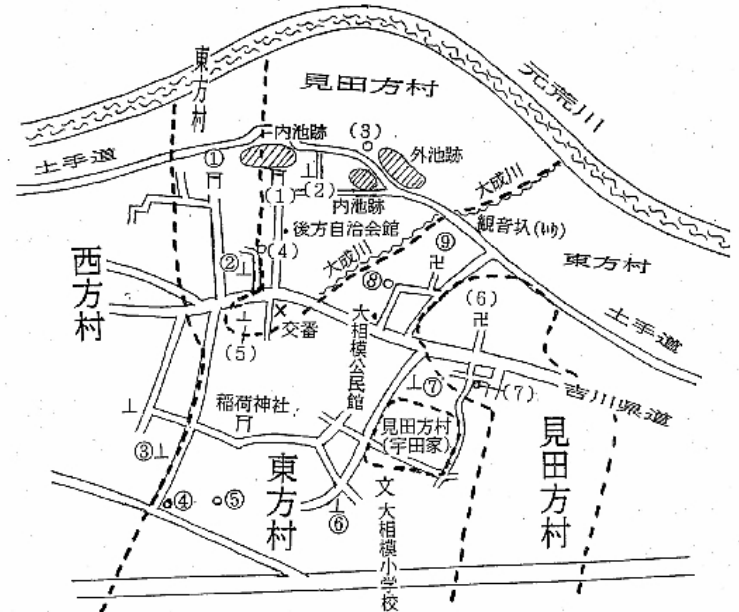
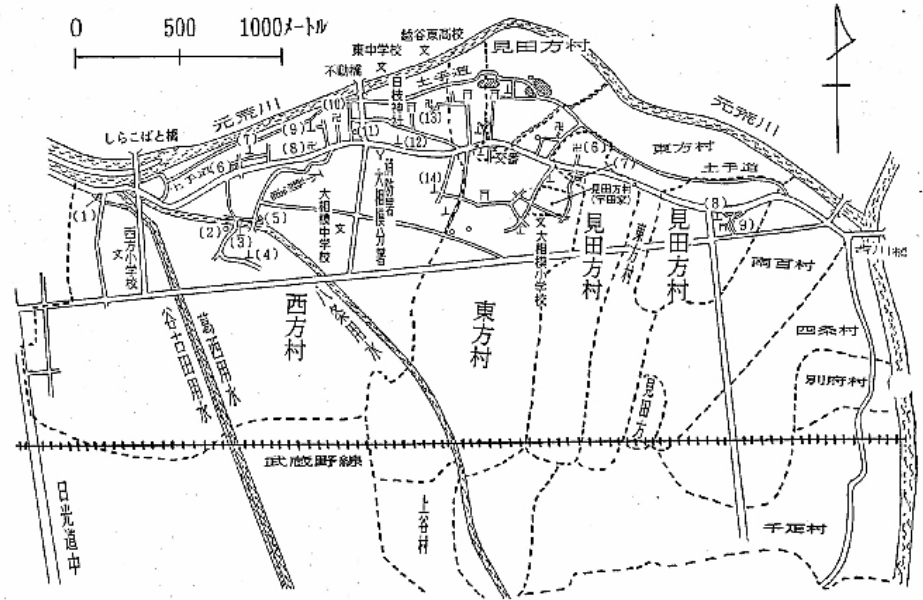
- 「桜井地区の石仏」(平成5年・6年)
- 「新方地区の石仏」(平成7年・8年)
- 「大袋地区の石仏」(平成9年・10年)
- 「増林地区の石仏」(平成11年・12年)
- 「大沢町・越ヶ谷町の石仏」(平成13年)
- 「荻島地区の石仏」(平成14年)
- 「出羽地区の石仏」(平成15年)
- 「旧西方・東方・見田方村の石仏」(平成16年)」

なお、平成五年から開始した石仏調査記録については、西方の大聖寺(大相模の不動様)内にある資料室(見学無料)にご厚意により保管させていただいているので、ひとこと声を掛けてからご覧いただきたい。
また、越谷市立図書館二階でも閲覧できる。

平成16年現在の未調査地区は、
大相模地区のうち南百、四条、別府、千足
蒲生地区
川柳地区



西方・東方・見田方の石仏案内図



2 林泉寺の開創当初のご本尊

木村 直忠 依攷

林泉寺の開創は、永仁五年（一二九七）である。最初「平僧寺」と名付けられた。実は、ここには「創建当初のご本尊」と言い伝えられてきた仏像が現存している。それが阿彌陀如来像である。その仏像の造立年代が平成十六年六月二十日に行った調査の結果によりわかった。ご本尊阿彌陀如来像の背中にかすかに「永仁五年」の文字が解読できたのである。

林泉寺の過去帳に、

「金佛阿彌陀如来根源ハ言寺本尊ナリ。永仁五（一二九七年）酉年ヨリ言寺本尊トナリ給フ。御長一尺二寸（三十六センチ）、凡明和六（一七六九年）己丑年迄四百七十八年ニナル。

十八世 性譽寺之記」

と記載されている。

林泉寺の開創と言いつた伝えられてきた平僧寺から西堂寺、上人寺と変遷し、現在の林泉寺となる。永仁五年に平僧寺が開かれてから明和六年まで数えて四百七十二年間の長きにわたって、それぞれの寺院のご本尊として信仰されてきたのであろう。右に紹介した過去帳では四百七十八年となっているが、昔は年号が年度の途中で度々変わり何度も繰り返してきて複雑なため、正確な期間をつかむのが困難であったのである。

ご本尊阿彌陀如来像が、林泉寺の開創当時のまま、鎌倉期から今日まで何と七百七年もの間、何一つ痛みもなくご存命であることさえ驚きである。これが確かな事実となれば、林泉寺及びその檀信徒にとって信仰上とても重要であるのは勿論、東国の古き仏像としても実に貴重なものといえるであろう。



3 蒲生の忠魂碑

菅波昌夫

蒲生の忠魂碑に刻まれている大東亜戦争の戦没者の時期は、昭和一六年から二〇年までで、ここでは今でいう太平洋戦争をさしている。戦没者総数は一一二名を数える。

戦没者が出た地域は、満州を含めた中国大陸が最も多く、フィリピン、ニューギニア、サイパン、硫黄島、太平洋諸島でも多くの方が戦死している。

また、昭和二〇年五月の沖縄本島の戦闘や八月の中国の戦線での戦闘で戦死を遂げるなど、終戦直前に亡くなられた方も多く見られる。

因みに、蒲生村における明治以降の戦没者は、次の通りである。
・明治一〇年の西南の役で 二名（「越谷の歴史物語 第1集」より）
・明治三七年〜三八年の日露戦争で 八名（「越谷の歴史物語 第1集」より）

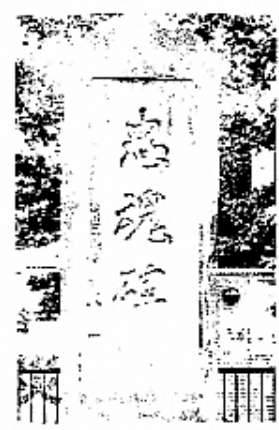
・昭和六年〜八年の満州事変で 一名（「越谷の歴史物語 第1集」より）
・昭和一六年〜二〇年の太平洋戦争で 一一二名（この忠魂碑より）

如何に太平洋戦争が大きな犠牲を出した大戦争であったかが窺がえる。

「忠魂碑の表面」

忠 魂 碑

埼玉県知事 大沢雄一書



「裏面上部」 「裏面に刻まれた戦没者の人数」

（太平洋戦争で亡くなられた一一二名の戦没者名が五段にわたって刻まれている）

争	陸軍一等兵 七名	上等技術兵 二名	陸軍々属 二名
英	陸軍上等兵 一七名	水兵長 一名	海軍々属 三名
戦	陸軍兵長 三六名	飛行二等兵曹 一名	
亞	陸軍伍長 一九名	二等兵曹 三名	
東	陸軍軍曹 三名	一等兵曹 四名	
国	陸軍曹長 二名	上等兵曹 一名	
大	陸軍少尉 一名	上等整備兵曹 二名	
殉	陸軍少佐 一名	主計整備兵曹 一名	
	上等水兵 五名	海軍少尉 一名	

「裏面の最下段向かって左端」

建設 昭和廿九年十一月一日
 年月日
 建設 蒲生村長 浅見英藏
 責任者 蒲生村議会議長金子左五八
 筆者 蒲生中学校長 秋山長作

4 関東大震災と越谷

原田民白

今から八十年程前の大正十二年（一九二三）九月一日に関東南部を襲った大地震は、東京をはじめ神奈川・静岡・千葉・茨城・埼玉・栃木・長野・山梨の一府八県の広範囲にわたって大きな被害をもたらした。

関東大震災の埼玉県における被害は、東京府（現、東京都）と千葉県に接した町村に被害が集中し、埼玉県下の人的被害として、死者二一七人、負傷者五一七人に達した。

越谷公団に建てる関東大震災の爪あと

越谷地域の被害は、死者一七人、負傷者六四人、壊れた家（住家の全半壊）は、八一五戸に達した。なかでも最も被害の大きかったのは、出羽村（現、谷中・大間野・七左町・新川町・宮本町・神明町）で、死者八人、重傷者二二人である。村の全ての戸数（住家）四四四戸の実に一五二戸が全壊という壊滅的な被害が生じた。

宮本町の迎楨院（こうしょういん）は、天文四年（一五三五）以前に開かれたと伝えられ、周辺地域で威容を誇っていたが、本堂の大伽藍や鐘楼堂等が倒壊し、貴重な文化財や文献をことごとく失うことになった。現在迎楨院には、関東大震災の爪あととして、迎楨院にあった鐘楼堂の石垣が今なお残されている。



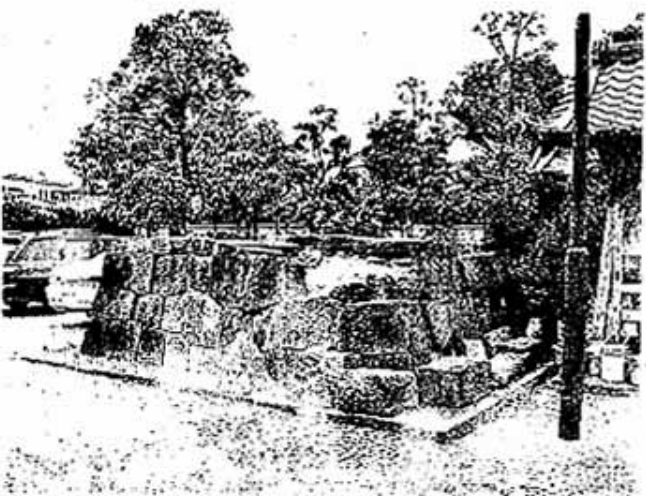
震災直後の迎楨院の山門

山門が倒壊を防ぐため丸太で支えられ、奥には倒壊した本堂のガレキが見られる。



現在の迎楨院の山門

山門の奥には、昭和42年に再建された本堂が見られる。



関東大震災で倒壊した迎楨院の鐘楼堂跡。くずれかかった石垣だけが残されている。先陣も戦時中の金属供出で今はない。

東武鉄道の被害を見ると、武州大沢駅（現在の北越谷駅）は、駅舎が倒壊し、車両五〇輛余りが焼ける被害が発生した。その後、駅の貨物置場を一部補修し、駅舎として三年間ほど使用した。また列車の運転は、西新井駅から粕壁駅間では九月六日まで営業休止に追い込まれ、西新井駅から浅草駅（現在の業平橋駅）間は九月二十二日までの長期間に及んだ。なお、粕壁町（現、春日部市中心部）では、町並みの家屋は倒壊するまでには至らなくても、傾いたり破損したりして満足な家はほとんどないという悲惨なありさまで、後に激甚地域に指定されている。

5 桶川の卯之助力石

須賀 弘・小泉平八郎

力持ちの卯之助の評判を聞いた桶川宿の商人達が卯之助一行を招いたのは、桶川で紅花景気が続いていた嘉永五年（一八五二）二月初午の日である。卯之助は、江戸力持番付の東の大関（当時の最高位）の地位と実力を見せ、彼の生涯で最大にして最重量の「大盤石（だいはんじゃく）」（二二五センチ、七五センチ、三五センチ）に挑んだのである。その挑んだ「大盤石」に刻まれている文字は、次の通りである。

大 盤 石	
嘉永五 ^壬 子 後歳二月	
岩槻 三ノ宮卯之助持之	
石主 大阪屋清右衛門	栗原權左衛門
大阪屋佐五兵衛	青木屋彦八
世 江戸屋重次郎	伊勢屋平兵衛
話 古久屋治郎右衛門	木嶋屋源右衛門
人 加藤市左衛門	林屋勘七
布屋彦右衛門	伊勢屋忠右衛門
布屋安五郎	



世話人の十二人は、桶川宿の大商人達で、多くは紅花を扱っていたといわれ、現在、このうち致軒が残っている。

「大盤石」の重さは二〇〇貫ともいわれられてきたが、昨年に実測したところ、六一〇キログラム（一六三貫）である。これは、これまで調査してきた全国各地の力石で最大のものである。

ロシアのアンドレイはジャークで二六〇キログラムを上げ、いわば現代の世界一の

力持といえるが、当時の日本一の力持の卯之助は、それをはるかに上回る巨石を持ち上げたことになる。「卯之助持之」（卯之助、これを持つ）と刻まれているが、高崎力氏は、「これ程の巨石は手持ちでは到底困難であり、足指ししたのではないか」と推定している。



※平成十六年八月二十九日（日）の「日本一の江戸力持 三ノ宮卯之助の生涯」（NPO 法人・越谷市郷土研究会常任理事の高崎力）の講演会資料より多くを引用しました。

6 木更津の卯之助力石

西村 功

千葉県木更津の観蔵寺に卯之助の力石がある。もとは、江戸にあったものである。観蔵寺の所在地は木更津市中里で、市の中心街から東京湾沿いに北上した所に立っている。観蔵寺の卯之助の力石には、次のように文字が刻まれている。

五拾五貫余

彌吉

定七

□右衛門

權藏

權治良

文政癸亥十月六日此自持

於之内田子刻之其人誰東都

三有力 芝土橋 久太郎

飯田町 直吉

萬本店 金藏

文政庚寅七月

武州岩附 卯之助

江戸本郷 久藏



この力石には、文政六年頃の江戸力持番付に東方大関芝土橋久太郎、関脇直吉、西方大関飯田町萬屋金蔵と掲載されている。いわば東都（江戸）力持の上位三名が名を連ねている由緒ある力石といえる。同時に、武州岩附卯之助、江戸本郷久蔵の名も残っている。

このことは、文政六年（一八二三）十月六日に江戸力持の有力者三名が持ち上げてから七年後の文政十三年（一八三〇）七月に同じ力石を卯之助と久蔵が持ち上げた力石である。このようなことは、先輩と後輩の関係、尊敬する人物にゆかりのある力石、先人の偉業にあやかる、先人に伍したとの誇りなどから行われている。

この力石が江戸から木更津に移ってきた経緯は、観蔵寺住職の山崎氏から高崎力氏への電話連絡によりわかったのである。

つまり「わしの三代前の住職の時、木更津から特産の海苔を積んだ舟が江戸へ運航していた。ある時、帰り舟に力石を積んできて寺近くの山口市郎兵衛という人の所に置き、近在の若者が集まっては力持ちをやっていた。後に先代住職の時、観蔵寺が力石を預かることになったんだ」ということである。

※平成十六年八月二十九日（日）の「日本一の江戸力持 三ノ宮卯之助の生涯」（NPO 法人・越谷市郷土研究会常任理事の高崎力）の講演会資料より多くを引用しました。

7 綱島の卯之助力石

林 和江

横浜市港北区綱島東の諏訪神社に卯之助の力石が四基もある。次の通りである。

◎飯田石 「奉納 飯田石 天保二年四月十五日 岩付卯之助 大木戸仙太郎 持之」

大きさは、71×50×32cm。天保二年は、一八三二年。

◎さし石 「さし石 四十貫 岩付卯之助 飯田氏」

大きさは、74×37×27cm。

◎池谷石 「池谷石 天保二年四月十五日 岩付卯之助 大木戸仙太郎 持之」

大きさは、65×42×32cm。天保二年は、一八三二年。

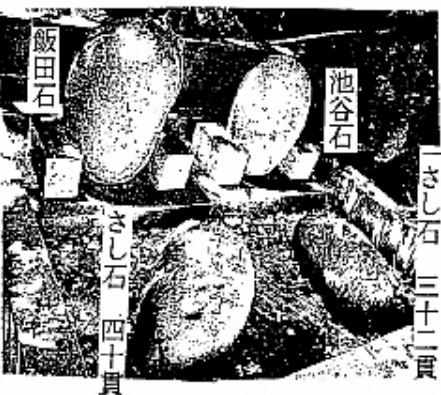
◎さし石 「さし石 三十二貫 岩付卯之助 大木戸仙太郎 持之」

大きさは、61×33×29cm。

以上の力石は、天保二年（一八三二）四月十五日に、南北綱島村の両名主が諏訪神社の祭礼に際し、卯之助力持一行を招待して奉納力持を開催した時に南北の両名主が奉納したものである。南綱島村の名主は池谷（いけのや）氏、北綱島村の名主は飯田氏である。現地の説明板には次のように紹介されている。

江戸時代、天保二卯年、南北綱島の名主が奉納した。その昔、御祭礼などの折に若者達が力くらべの競技に用いたと思われる。飯田家、池谷家が持石とさし石を、夫々一個ずつ奉納し、これを持ち上げた力自慢として力士卯之助、仙太郎の名が刻まれている。池谷家文書の日記の中で、天保二年四月十五日の項にこのくんだり
 が記され、裏付けられている。

一、飯田石 岩付卯之助 大木戸仙太郎 持之
 さし石 四十貫 岩付卯之助
 一、池谷石 岩付卯之助 大木戸仙太郎 持之
 さし石 三十二貫 岩付卯之助 大木戸仙太郎



横浜市には、卯之助の力石が他にあと二箇所にもある。次の通りである。

〔山田神社〕（横浜市都筑区南山田）

切り付け 「岩つき 卯之助」 寸法 縦六〇×横三三×厚さ二五cm

重量 三拾貫六百（神社の説明碑から）

年代 不明

〔杉山神社〕（横浜市都筑区大熊町）

切り付け 「大くま 岩付卯之助 大木戸仙太郎 持之」

寸法 縦七八×横三七×厚さ三五cm

重量と年代 不明

なお、大木戸仙太郎の「大木戸」とは、高崎力氏によると、高輪の大木戸をさすという。

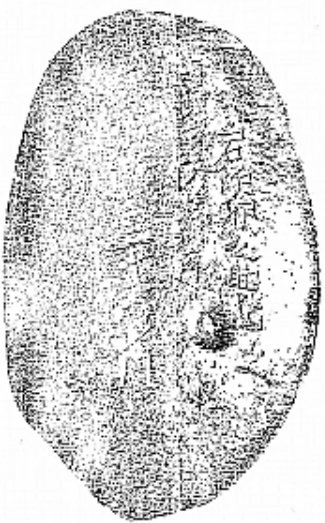
※平成十六年八月二十九日（日）の「日本一の江戸力持 三ノ宮卯之助の生涯」（NPO 法人・越谷市郷土研究会常任理事の高崎力）の講演会資料と平成十六年七月十六日（金）の第三三二回史跡めぐり資料を参照し、多くを引用しました。

8 川崎の卯之助力石

十古澤 孝

川崎大師には、一列に並んだ五個の力石がある。その中に卯之助の力石がある。そこに刻まれた文字は次の通りである。

岩附卯之助 指之
 八月日
 奉納 三十六貫目
 大師川原 石川氏
 當所 四ツ家 伊之助 指之



「卯之助力石は五個の力石の中で、一番端にあり、最小(三十六貫目)となっている。卯之助の力石が最小となっているその理由は、高崎力氏によると「故意に力を発揮せずに控えめなのは、彼は地元の力士に非常に気を使う人で、自分の力がまさっていても、自分は軽い石にして地元力士に華を持たせようとしたからであり、一種の力持処世術ではなかったか」と推測している。一方で「卯之助単独の時には、最大の力で最大の力石に挑戦している」としている。

川崎大師の卯之助力石は、その後、大師川原の石川氏と四ツ家伊之助が指している。「このようなことは他にも例があり、卯之助が指した後に江戸力持番付で東の大関となったことから、卯之助の力石は由緒ある力石として他の者も挑戦したものである」という。川崎には、大師駅前の若宮八幡神社にも卯之助力石がある。そこに刻まれた文字は、次の通りである。

大木戸
 仙太郎
 卯之助
 岩附
 當所 四ツ家 伊之助 指之



若宮八幡宮の卯之助力石も四ツ家伊之助があとになって指したであろうことがわかる。

※平成十六年八月二十九日(日)の「日本一の江戸力持 三ノ宮卯之助の生涯」(NPO法人・越谷市郷土研究会常任理事の高崎力氏)の講演会資料を参照し、多くを引用しました。

越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

NPO法人・越谷市郷土研究会の紹介

(平成16年10月現在)

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、また、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和40年(1965)3月に発足しました。
以後地道に活動し、現在は会員数が340名程の大所帯となりました。
ほぼ毎月行われる史跡めぐりは10月で333回を数えるまでになりました。

◎平成16年1月24日に『NPO法人・越谷市郷土研究会』の設立総会を開き、5月27日に法人格を取得し、正式に発足しました。

◎当会の今年の主なイベントをあげますと次のとおりです。
平成16年1月3日(土) 恒例の七福神めぐり(深川方面)
平成16年1月25日(日) 講演会「下間久里の獅子舞」
平成16年2月29日(日) 江ノ島方面(江ノ島神社、七里ヶ浜、卯之助力石)
平成16年3月25日(木) 古河方面(鷹見泉石記念館、桃祭り、渡瀬遊水池)
平成16年3月28日(日) 市内・大袋地区の史跡めぐり
平成16年4月13日(火) 越谷鶴場見学
平成16年4月24日(土) 最後の水戸藩主・徳川昭武の邸と庭
平成16年5月30日(日) ペリー来航150年・日露戦争100年
平成16年6月20日(日) 埼玉県立民俗文化センターの公演・団体鑑賞
平成16年7月16日(金) パス史跡巡り・卯之助力石を横浜川崎を訪ねる
平成16年8月29日(日) 記念講演会「日本一の江戸力持、三ノ宮卯之助」
主催は、越谷市教育委員会とNPO法人越谷市郷土研究会、後援は越谷市
平成16年10月24日(日) 第333回史跡めぐり(足利方面)

◎郷土研究会ニュース「りせ」の発行

◎会報『古志賀谷』の隔年の発行(B5版、百十~百五十頁程度)及び無料配布
内容は主に会員による郷土の調査・研究の報告や随想の寄稿文などです。

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付活動なども行ってきました。

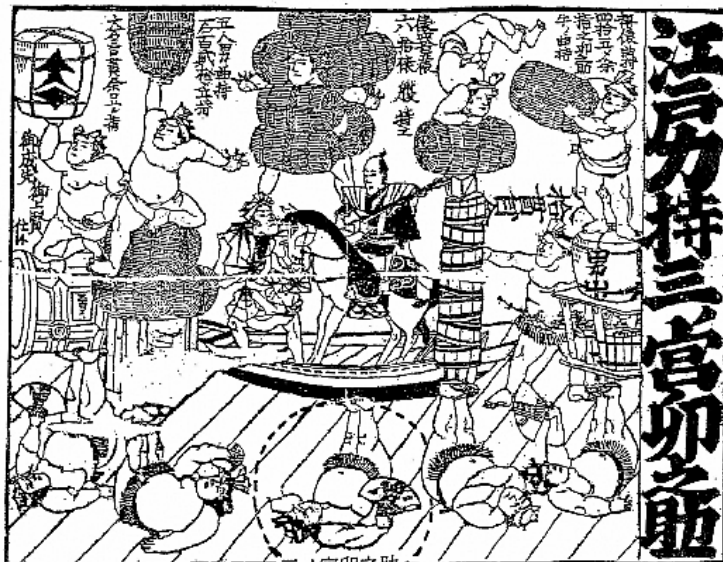
郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間2千円(4月~翌年3月、会報・諸案内状・諸会議費等)です。
どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。

または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

☎343-0806 越谷市 宮本町 3-117-8 谷岡隆夫方
NPO法人・越谷市郷土研究会
☎048-962-7527



三ノ宮卯之助の力持ち興行の引札(広告)

昭和26年(1951)木版刷り《高崎 力蔵》